トラッシュ

山田詠美

文藝春秋

トラッシュ

山田詠美

トラッシュ

一九九一年二月一五日　第一刷
一九九一年一〇月二五日　第七刷

著者　山田詠美
発行者　豊田健次
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話　〇三(三二六五)―一二一一
印刷　大日本印刷
製本　加藤製本

万一、落丁乱丁のある場合はお取替え致します

©EIMI YAMADA, 1991 PRINTED IN JAPAN

ISBN4-16-312370-9

トラッシュ

装丁・平野甲賀
装画・橋本シャーン

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

第一部

今、一番、恋しいものは何かと聞かれたら、彼女は即座にベッドと答えるだろう。それは、今まで彼女の慣れ親しんできた友達のようなベッド、つまり、必ず自分以外の体温がシーツに寝そべり、自分の頭の形にくぼんだ都合の良い腕のつけ根の枕を持ち、皺が皮膚によってプレスされた毛布の載せられたベッド、ではなく、ただ単に眠るためだけに存在する単細胞のベッドのことである。

そんなベッドに、彼女は寝たことがあっただろうか。あったとしても、それは、はるか昔のことである。眠るベッド。ある時は、眠ることは、死ぬことに似ていると思わせるような本式のベッド。とりあえず、死んでしまおうと毛布に、もぐり込めるような安らぎと孤独を兼ね備えた寝床に体を横たえたいと彼女は心の底から思っている。そこには、他人のどんな感情も入り込まず、従って、自分の感情もからめ取られたりはしない。だいたい自分の感情は、つりざおに引かれていく水の中の魚のように、隙だらけなのだと、彼女は思っている。餌のゆらめくのを見ると、すぐにそれと関わりを持ちたがる意志の弱いものなのだ。

彼女は、もう色々なことをあきらめて、恋しいものを順番に思い出したり、恋心がどの瞬間に消えたのかなどを点検している。それは、数時間の間に、すっかり遊びと化してしまい、彼女を夢中にさせる。そして、

ふと、どうして、自分が床に座り込み、ベッドが横にありながら、寝られないでいるのだろうと考える。ベッドの横で、ベッドが恋しいと呟くなんて、あまりにも馬鹿気ている。けれど、それは、ベッドであって、ベッドではないのだ。今まで、愛してきた暖かいものでも、もう既に、ないのだ。ただの大きな道具にすぎない。そして、その大きな道具の足に、彼女は手錠でつながれている。

罪を犯さなくても、手錠の感触を味わうことが出来るということだ。けれど、もしかしたらと、彼女は思う。本当は誰もが、手錠をかけられたまま、一生を過ごしていくのではないだろうか、と。目に見える手錠と目に見えないそれの違いはあるにしても。

目に見える手錠は、目に見える罪のためにある。そして目に見えない手錠は目に見えない罪のために。それでは、私は罪を犯したのだろうか。げんに、この鉄の輪は彼女の手首に食い込んでいる。目に見えない罪のために、本物の手錠をかけられるなんて、法則に逆らっているのではないだろうか。不公平だと彼女は呟く。そして、そんな可愛らしい言葉など似合うような状況ではないと絶望する。

もうじきジェシーが学校から戻るだろう。そして、ベッドにつながれている私を見て、叫び声をあげるかもしれない。それとも、スクールバッグだけを放りなげて、そのままアレックスの家にでも行ってしまうかもしれない。ベッドルームには、見てはいけないものが多過ぎることを、もう彼は知っているのだ。彼女が呼ばない限り、彼は彼女の姿を見ることはないだろう。ジェシーに助けを求めたところで、どうにもならないかもしれない。目に見える手錠がはずされるだけのことだ。自由になれる訳はない。まだ愛情が取り巻いている。まだ憎しみが漂っている。そのどちらも、丸めて捨てられるごみには、成り得ないのだ。まだ生きている。生きて、彼女の息を詰まらせる。目に見えない罪が、あっちこっちに沈んでいて、彼女は、つまずくことなしに歩くことは出来ないだろう。

ジェシーは、私の手錠をはずしながら、同情の目で私を見詰めることだろう。そう思うと、このままの方

がましかもしれない、と彼女は思う。いくら、彼が物解りがよくなってきたとはいえ、こんな世界に立ち入るのは早過ぎる。愛はいいけど、憎しみは駄目だ。自分が憎しみを持つのはいいけれど、他人の憎しみは、味わう価値などないものだ。

ジェシーは、きっと、こういうだろう。

「ココ、きみって、事を荒だてることが好きだね」

それを後悔しているから、彼女は死んだベッドの方を選びたいのだ。

昨日は幸福だった。そして、一週間前も幸福だった。それでは一年前は、どうだっただろう。ココは、しばらく考える。幸福だったと言うしかないだろう。それは、つかみ取ることの不可能な実感のない幸福ではあったが。

いや、やはり、不幸だったと思う。何もかもが満たされていないのに、他のものがその欠けた部分を埋め合わそうとやっきになり、そして溢れ出た。自分の心が、まるで着なれないセーターを着続けているような不快感を感じていた。自分は、とても可哀相だった。それは、もしかしたら違うのかもしれない、とも思う。どちらかと言えば、着古したセーターを着続けて、裾のほつれた不便を黙認するような気安さを、味わっていたとも言える。そう考えると、それは幸福だったと思う。でも、解らない。どうして、こんなにも、幸福を定義しようとすることは、不幸を思い出すことに似ているのだろう。

あの一年前の春の日、私は、リックに情熱を持っていた。ココは、それをはっきりと口にすることが出来る。二年間、生活を共にした連れ子のジェシーとも、うまくやっていく方法をわきまえていた。彼は、驚く

程、大人びるのが早かったし、彼は、彼なりの面倒の避け方を習得したから、ココには、ようやく楽をすることが許されてきたのだった。そして、それと同時に、新しい問題も起き始めていたが、リックへの情熱で、なんとか乗り切ってしまおうと、彼女は決意していた。何と言っても、彼を私のように愛せる女は、どこにもいやしないのだ。この確信が、ココの力のすべてになっていた。だから、あんなことが起こったからといって、くじけたりしなかったのだ。

その日の夕方、ココとジェシーは、突然の訪問者を迎えて困惑しきっていた。小雨の降りしきる日、ベルの音を聞いたココが、ドアを開けると、そこには、びしょ濡れの白人の女が、うすら笑いを浮かべて立っていた。女は、同じように濡れて、仔猫のような小さな男の子を連れていた。物売りだ、と、ココは咄嗟に思った。けれど、アパートメントの入口には鍵が付いている筈だ。それを外して、入って来る物売りなど、いる筈がない。

「あの……どなたですか」

「こんにちは、あなたがココね、私の名前は、アイリーン。ちょっと、お願いがあって来たの。入っていい？」

ココは、初対面のやせた金髪の女を目の前にして、どう対応して良いのか解らずに、おろおろしていた。

「ココ、誰か来たの？」

コンピューターゲームに興じていたジェシーが、ナッチョスを齧りながら部屋から出て来た。そして、びしょ濡れの二人を見て息を飲んだ。

「アイリーン……それにジェフリーも。一体どうしたの？」

「こんにちは、ジェシー、久し振りね。入っていいかしら」

女は卑屈そうに笑って、上目づかいでジェシーを見た。彼は、困ったように、ココを見詰めた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

「誰なの、ジェシー、あなたの知り合い？」
「ダディの友達」
「ふうん……」
リックの友達にしても、電話もなしに、突然、訪ねて来るなんて、常識ないわ。ココは、そんなふうに感じながら、二人を部屋に入れた。
「あーあ、ブルックリンから、ここまで来るのは大変」
アイリーンは、肩の雫を払いながら言った。
「あの、せっかく、いらしても、今日は、リック、夜勤で、朝まで戻らないんです」
ココは、すまなそうに、言った。アイリーンは感じの良さそうな女だったし、ジェシーがリックの友達だと言うのだから、心配することもなさそうだ。それに、彼女は、初対面のココに対して驚く程、親しみ易い口のきき方をする。
「知ってるわ。いつも水曜日が、夜勤だってこと。今日は、彼にじゃなくて、あなたにお願いがあって、来たんだもの。こら、ジェフ、人のおうちの冷蔵庫なんて、開けたりしないの！　ごめんなさい。最近、ようやく、あれが開けられるようになったものだから」
ジェフリーは舌を出して、ジェシーの部屋に駆け込んだ。金髪がさらりと揺れて、まるで人形のようだと、ココは思う。それも、この界隈には、決して売っていない人形だ。
「可愛いお子さんですね」
「そう思う？」
「この辺じゃ、ああいうタイプの子なんて、見かけないから」
「よかったら、あげるわ」

「は？」
「冗談よ。言ってみただけ。ねえ、ココ、私、リックから、あなたの話、よく聞くわ。この部屋も、以前とは全然、違う雰囲気。あなた、アーティストなの？　あの絵、素敵ねえ」
アイリーンは、心から感心したように、部屋の中を見渡した。
「ヴィレッジのギャラリーで働いているの。アーティストなんかじゃないわ」
「ふうん、でも、あなたのスタイル、感じさせるわ。リックも、前の人より、ずっと、センスのいい女、見つけたみたいね」
「前の人が、ひどすぎたのよ」
いつも、思い出すたびに嫌悪感がこみ上げてくるリックの前の妻のことを話題にされて、ココは苛立ちを覚えた。あの人は、ジェシーの母親なのだからと、何度も、自分に言い聞かせるのだが、生理的な嫌悪感は、どうすることも出来ない。その種の嫌悪というのは、ある程度までなら、思いやりと成熟したものの見方で、自分の心の中で押さえつけることが、出来るものだ。それを、こじ開けて、露出させるのは、嫌悪を与える側の責任である。ジェシーの母親は、好意というココに貼り付いた薄っぺらな膜を、自分の手で引き剝がしたまま、走り去った。人間って、さほど悪いものじゃない。このココの想い、その想いを常に持ちたいという願望を、彼女は、粉々に砕いてしまったのだ。まだ憎んでいる。ココは、彼女の姿を思い出すたびに、自分の気持が長続きしていることを感じ、驚く。そして、腹立ちを押さえ切れなくなるのだ。ココは、その気分を「レストランで食い逃げをされた支配人の気持」と、呼んでいる。常連客に紹介されて来た客を精一杯もてなしたあげくに逃げられた支配人は、こんな気持だと思うのだ。
「よっぽど、リックの前の奥さんのこと、嫌いなのね」
アイリーンは含み笑いをしながら言った。

「まあね。思い出したくないの、あの人のことは」
「何が、あなたに、そんなふうに思わせたわけ？」
ココは、ふと考える。理由をあげつらえば、きりがないけれど、どれもこれも、他人に話しても解ってもらうことなど出来ない種類のものだ。自分、そして、リック、それから、もちろんジェシー。この三人だけが共有しているものなのだ。生活という同じ時の流れの空気を吸いながら、つながりを持った者同士にしか理解出来ないものなのだ。もちろん、ジェシーの母親も、そういうつながりを持った人間を身近に置き、ココに関するネガティヴな感情を共有しているのだろうけれど。おあいこだわ。ココは思った。私が憎んでも許される筈よ。
「あの人、スマートじゃないからよ。それだけのことだわ」
ココのこの言葉に、アイリーンは、肩をすくめて、よく解らないという動作をした。
「ところで、私に、お願いって、どういうことなんですか？」
アイリーンは煙草に火を点けて、煙草をはさんだ手を自分の額に置いた。最初の煙で、彼女の表情が一瞬、くもる。
「スマートじゃないなんて、言われそうだけど、誰にも頼む人、いないの。ベイビーシッターなんて頼んだら、私のだんな、頭に来ちゃうだろうから。お願いっていうのはね、ジェフのこと、少しの間、見てて欲しいってことなの」
ココは、思わず、アイリーンを見つめた。冗談じゃあない、という気持だった。子供の面倒を見るということは、ココの最も不得手とするところである。そのために、ジェシーと生活してきた二年間、彼女はどれほど苦労してきたことか。世の中には、子供相手を得意とする人間と、そうでない人間がいるのだ。それは、まるで、数学が得意であるか、国語が得意であるか、というような他愛もない違いでありながら、不得意な

科目に対して、多大なエネルギーを必要とするのと同じくらいの重大事である。
「どうして、私に頼むの？　初対面なのよ。初対面の人に頼める程、あなたの子供って、軽い存在なの？」
「そんなに大問題にしないでよ。子供を持ったことのない人って、子守を、すぐに重大事件みたいに扱うんだから」
「私にとっては、重大問題だわ。私、子供って聞いただけで、責任って言葉に押しつぶされそうになっちゃうんだから。反対に言わせてもらえば、責任感ないのよ、母親になった人って。ううん、責任感はあるんだけれど、他人にそれを押しつけるのが上手いのよ」
「あなたしか頼めないのよ」
「友達、いないの？」
「いるわ……」
「じゃあ、子供のいる親切なお友達に頼めばいいじゃないのよ」
「子供のいる母親って、理解がないのよ」
「あなたの言ってること、全然、解らないわ」
　アイリーンは、根元まで吸った煙草を灰皿の中に押しつけた。
「一時間でいいの。ジェフリーとジェシーは、昔、よく一緒に遊んだのよ。あの子、全然、迷惑かけないと思うわ。やんちゃだけど、きちんとしつけてあるから。もし、悪さをしたら、怒鳴りつけてもかまわない」
「冗談じゃないわ。人の子を怒鳴るなんて、疲れること、私、したくない」
　アイリーンは、すがるような目で、ココを見詰めた。瞳の色が青から灰色に変わっている。そして、それは、金髪のおくれ毛をみすぼらしく見せる。そして、それは、ココを苛立たせる。他人が、みすぼらしく自分の目に映ること、それは、ココが一番、忌み嫌うものだった。彼女がジェシーの母親を嫌悪している理由

の大部分は、そこから来ていた。ココは、みじめなものを見ることに慣れていなかったのだ。そして、みじめなものを見た時に、はからずも自分の内によぎる無意識の優越感が我慢ならなかった。優越感を感じるのは心地良い。けれど、それは、優越感同士のぶつかり合いによるものに限られていて、劣っているものに対して、喜びを感じる器官を彼女は持たなかった。

ココは、アイリーンの頬に貼り付いたおくれ毛を見て、冷汗をかいた。まったく、もう。母親っていう人種は、どうして、こういうものを他人に見せてしまうのかしら。困っちゃう。やってらんないのよね、こういうの。

「OK。どういうことか知らないけど、いいわ。ただし、あなたの言ってる一時間だけよ」

アイリーンは、ほっとしたように、二本目の煙草に火を点けた。その火の点け方。それを見て、ココは自分の言葉を後悔した。二本目の煙草のけむりを深々と吸い込む様子は、もう既に、母親のそれではなかった。もしかしたら、男に会いに行くのかもしれない。そんな考えが、ココの胸をよぎった。でも、もしそうだったら、あんなみすぼらしい様子を漂わせてまで、どんな男に会いに行くのかしら。

「本当にありがとう、ココ。あなたの親切、忘れないわ、ベイビー」

「初対面の私に、こんなこと頼まなきゃならないあなたに同情するわ、アイリーン」

アイリーンは、少しの間、下唇を噛んでうつむいた。ココは、自分が彼女のために何かをしてあげるのだという使命感を持っている、などというふうに、彼女が受け止めなければ良いのだが、と危惧した。恥しいのだ、自分が、親切な人間などと思われてしまうのが。第一、自分の心には、もっと複雑な感情が渦を巻いている。何故だか解らない。いつの頃からか、ココの心には、自分を良い人だと思われるのが恥しいという気持が宿っている。

それは、長いこと一緒に生活してきたジェシーに対する態度に如実に現われている。ココの理想は、彼女

のある種偽悪的な態度や発言から、羞恥心はあっても、まるで悪意のないという真意を相手が汲み取ってくれるということだったが、ジェシーは、まさに上手に、彼女の心の内を見破った。ココが、どんなに意地悪な言葉を吐いても、彼は肩をすくめて、あんたの気持は解ってるんだからさ、とでも言いたげな表情を浮かべるのだった。そのくらい彼は、二年の間に、素早く成長してしまったのだった。

その点、リックは、駄目だった。大人になってしまった男は、少しの言葉で傷付くし、それと同じだけの傷をココ自身に返そうなどとやっきになったりするので、彼女は時折、疲れた。肉体でつながっている男は、その感触を頼りにしがちだから、心の面では鈍感になるのかもしれないと、彼女は考えたりするのだった。

「ねえ、私に、あなたの息子の面倒を見させるのなら、あなた、どこに出掛けて、いつ戻って来るのか、言わなきゃならないわ。何かあった時に、おろおろするのは、まっぴらだもの」

ココの言葉にアイリーンは、うつむいた。

「友達のとこ」

「電話番号を教えてよ」

「解らない」

ココは、あきれてしまい、アイリーンの顔を、まじまじと見詰めた。

「何か、なんて、ないわ。私、ずっと、子供に何かあったらと思って、側に付いていたけれど、何かあったことなんてないのよ」

「すごい理屈……信じられないわ!?」

母親が側に付いているだけで、子供に振りかかろうとする不幸が逃げていくという迷信にも似たものを、ココは未だに信じていた。もちろん、ジェシーのことを思い出すと、母親はいなくても、子供は、何とかやっていくのだというのが解る。けれど、やはり子供は、母親の超能力に守られる必要があると彼女は思って

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com